

流入の少い時に建築も少いのである。同じような関係が雇傭の變動、國民所得に占める賃銀・利潤の割合の變動、國際收支の變動にも見られる。また移民の少い時はイギリスの資本構造は擴張され、アメリカの資本構造は擴充される。移民の多い時はその逆になる。等々。

以上の他若干の問題を提出しているが茲では省略する。最後に二點を指摘したい。第一、人口移動と資本移動の関係である。本書では實證的研究が主であるから生産要因移動一般としては必ずしも觸れられていないが、このような實證的研究により、多くの要因移動を含むより現實的な動態的國際經濟理論が生み出されてよくはないか。第二、minor secular fluctuationsと傾向だけで果して經濟成長が述べうるものであるか。以上二點は本書の分析に關連して筆者がいただいた問題であるが、その他に本書最終章では多くの問題が提起されていることを附記する。(逸見謙三)

Л. Майзенберг

『ソ同盟國民經濟における價格形成』

Майзенберг, Л.: Ценообразование в народном хозяйстве СССР. Госполитиздат. 1953. 261 стр.

社會主義經濟における價格の問題は、資本主義社會にあって社會主義經濟を研究する者にとっては、これまでつまずきの石の一つであった。頭のなかで任意の社會主義社會——と考える——の像をえがき、そこでの價格についてあれこれと論ずる者にとっては、資本主義的價格のアナロジーからのがれることはむずかしい。社會主義經濟についてのまったくの無知をみずからしめした Mises や Hayek などはずでにとわなないとしても、かの競争的社會主義經濟と稱する「解決法」のなかにも、それはいちじるしくみとめられる。そのことのおもな原因は、體制をことにする二つの社會の基本的經濟法則のちがいはっきりとつかまえていないことにある。そのような立場からは、社會主義社會における價格が、資本主義的要素の清算の條件の創出や社會主義經濟の強化のために、國家計畫の作成とその遂行點檢のために、また勤勞者の實質所得の系統的増大のために利用されるということが、ほんとうにはつかめないのである。そこでは價格は、盲目的に市場においてあたえられるものではなくて、社會主義社會の成員の物質的および文化的要求の最大限の充足という目的にかなうように、成員自身によって、基本的には國家機關の手を通して、制定(=計畫化の一部、されるものである。もちろん、だからといって、社會主義社會における價格は勝手氣ままに制定されうる

ものではない。この價格の存在自體が、社會主義社會における二つの形態の所有の存在に起因する、一定の範囲内での商品生産と商品流通の存在、したがって價值法則の作用の存在、と結びついていること、それゆえにまた、價格の形成と價格水準の變化とが、終局的には、貨幣形態で表現された社會的に必要な生産費の變化を、その客觀的基礎としていることは、いうまでもない。ただ、個々の生産物についてみとめられる價值と價格との背離が、さきにもべた目的を實現するように、計畫的にさだめられるにすぎない。

それらのことは、現實に存在する社會主義社會の考察を出発點として社會主義經濟の研究をしている者には、基本的にはわかっているといつてよい。ただ、資本主義社會にあってこの研究をすすめる者には、それらのことが具體的にどのようにおこなわれているかが、これまで十分には明らかでなかった點がすくなくない。自然、細部については「かくもあろう」との想像にもとづくほかはなかったし、そのことが、社會主義經濟の理解をいっそう深める上で、また、はじめにのべた立場をとる人々が意識的ないし無意識的におこなう曲解を論破する上で、ある程度の障碍となっていた。社會主義經濟における價格の問題にいつても、そのことはいえよう。したがって、社會主義經濟の制度や機構をくわしく知ろうとの要求は、たんなる百科事典的興味からでてくるものでなく、正しい社會主義經濟研究をさらにすすめようとの意欲からでてくるものである。

ところが、この要求に答える書物は、これまでソ同盟でもあまり数多くは出版されなかったようである。おそらくは、社會主義社會に住む人々にとっては、それは多くのばあい眼前にある自明の事實であるからでもあろう。またたとえそのような書物が出されたとしても、われわれがそれをみる機会をきわめて制限されていたこともたしかである。ともあれ、われわれ日本の社會主義經濟研究者が、この要求をみたしてくれる書物の到來を一様に渴望していたことは、事實である。

ここにとりあげた書物は、まさにこの要求をみたすものの一つである。本書の翻譯は野々村助教授ほかによってすでにすすめられているとのことであり、これが世にでるのもさして遠くはあるまい。また Коммунист 誌 1954 年第 16 號には Д. Кондрашёв による本書の書評がのっている。これは本書を、「全體としては肯定的評價にあたいする」とのべ、「本書のなかでは、體系づけられたかたちで、社會主義社會における價格形成の重要な問題が解明され、價格の計畫化の方法が究明されている」と、その性格を規定して、本書のもつ積極的意義をかな

り高く評価すると同時に、敘述のなかの不十分な點をいろいろ指摘している。この書評は本書の讀者に参考になることが多いから、邦譯書のなかにこれをあわせておさめられることをお願いしたい。それらのことを前提として、ここでは、順序をおっての内容紹介も、Кондрашѐвの指摘のくりかえしも、避けたいと思う。

序文と結語のほかに8章からなりたっている本書は、「ソヴェトの價格政策の基本線を、この政策の軸を、なしているのは、價格の系統的引下げである」(стр. 33)との命題を、その根底にしている。そして、はじめの部分では、價格引下げがソヴェト國民經濟のなかでもつ意義と價格引下げの可能性の所在とを明らかにし、最終章では、ソ同盟における價格體系を社會主義社會の發展段階をおって記述している。(なお、工業製品の價格を系統的に引下げる政策がソ同盟の經濟政策の土臺石であることについては、たとえば、邦譯スターリン全集第9巻219ページ以下、同第10巻248ページなどを参照されたい。)それゆえ本書のなかでの社會主義工業における價格の構造とその構成諸要素の個別的分析について的一般論の部分も、それにつづく生産手段の國家卸賣價格と大衆消費物資の國家卸賣價格および國家小賣價格との計畫化についての記述も、この基本線の實現を保障する道を明らかにする性質をもっている。また、價格の計畫化にあたって價值法則を社會主義經濟の強化發展のために利用するということが、抽象的にではなく、實例で理解できる個所もすくなくない。だが私は、本書をはじめて讀んだとき、ともすれば百科事典的興味でページをめくってしまったことを告白しなければならない。それほどまでに、すくなくとも私にとっては、眼新しい具體的知

識が數多く提供されているのである。それはたとえば工業の新製品の價格制定法、工業各部門の價格の整合(увязка, co-ordination)の方法、卸賣價格引下げのさいの價格變更バランスにかんする問題、各種運輸手段の合理的利用を目的とした鐵道運賃率の實例などであった。そのような、いわゆる「木をみて森をみない」讀み方が本書を活かす道ではないことは、いうまでもない。けれども、價格形成にかんしての具體的事實が豊富であるという本書の一長所が、讀み方によっては十分には活かされないおそれがあるということは、指摘しておく必要がある。それから、これはいささか望蜀のきらいがあるが、現行制度について問題がのこされている點や、なお改善の餘地があるとされている點の指摘もそえられていたら、本書はさらによかったであろうと思う。それはもちろんあらさがしのためではない。國民經濟の計畫化は「つぎの二つの條件がまもられてはじめて實際の成果をあげることができる。すなわち、(イ)それが國民經濟の計畫性ある發展の法則の要求を正しく反映しているばあい、(ロ)それがあらゆる點で社會主義の基本的經濟法則の要求と一致しているばあい、である」(スターリン)との命題を、その實例がわれわれにふたたび考えさせる機會をあたえてくれるであろうからである。

Кондрашѐв は上記の書評のおわりの部分で、ソ同盟における「價格形成の問題にかんする大部で多面的な文獻にたいする要求は熟した。價格形成にかんする多くの研究やモノグラフィーや科學普及書を準備し出版しなければならぬ」と書いている。それらを消化するためにも、まず本書を讀んで考えておく必要がある。

(池田顯昭)